

令和八年六月度 御報恩御講拝読御書

可延定業御書

文永十二年二月七日

五十四歳

夫病それやまいに二あり。一には軽病けいびょう、二には重病じゅうびょう。重病じゅうびょうすら善医ぜんいに値あ

ひて急きゆうに対治たいじすれば命いのち猶存なおそんす。何いかに況いわんや軽病けいびょうをや。業ごうに二あ

り。一いちには定業じょうごう、二にには不定業ふじょうごう。定業じょうごうすら能よく能よく懺悔さんげすれば必かなら

ず消滅しょうめつす。何いかに況いわんや不定業ふじょうごうをや。法華經ほけきょう第七だいしちに云いはく「此この經きょう

は則すなわち為これ閻浮提えんぶだいの人の病ひとやまいの良薬ろうやくなり」等ら云い。

令和八年六月度 御報恩御講 『可延定業御書』 (御書七六〇二行目〜四行目)

【通釈】

そもそも病には二つある。一つは軽病、二つには重病である。重病ですら善い医者に値い、直ちに治療すれば命を長らえることができる。まして軽病ならばなおさらのことである。また、業にも二種類ある。一つに定業、二つには不定業である。(重い)定業ですらよく懺悔すれば必ず消滅できる。どうして(軽い)不定業が消滅できないことがあるのか。法華経第七には「此の経は則ち為れ閻浮提の人の病の良薬なり」等と説かれている。

【主な語句の解説】

定業・不定業：業とは身口意による一切の行為のことで、受ける善悪の果報とその時期がすでに定まっていることを定業といひ、定まっていないことを不定業という。不定業は定業と比べれば軽い業といえる。また本抄のように、人の寿命に定まりのあることを定業とし、定まりのないことを不定業とすることもある。

此の経は良薬なり：法華経薬王菩薩本事品第二十三(法華経五三九)の文。法華経が一切衆生の大病を癒やす第一の良薬であることを示す。末法においては、御本仏日蓮大聖人が説き顕された下種の妙法こそ、末法の衆生を救う真実の良薬となる。

【背景と大意】

本抄は、文永十二(一二七五)年二月七日、日蓮大聖人が五十四歳の御時、富木常忍の夫人である尼御前に与えられた御消息です。

尼御前は、文永十一年九月頃には病を患っており、四条金吾がその再発を案じていました。これを耳にした大聖人が、尼御前の平癒を願い、信心を根本に病気を克服する方途を示されたのが本抄です。

拝読の御文は、冒頭において軽病と重病、定業と不定業について示されるところです。

本抄では次に、法華経こそ仏の実語であり、不軽菩薩が法華経を聴聞することで寿命を延ばしたとされる故事、また大聖人の御母堂が大聖人による法華経の祈念によつて、寿命を四年延ばすことができたとされた事例を挙げ、尼御前も、不惜身命の信行を通して必ず病気を克服し、無上の財である寿命を延ばすに違いないと励まされています。

最後に、法華経信受の人を守護する諸天善神に対しても尼御前の快復を祈念する旨を述べ、本抄を結ばれています。